

報恩寺と大原

大原公民館長 矢那瀬忠作

報恩寺は、昭和三十八年本町から円光に移った。

本堂落成祈念碑には次のように記述されている。

「古来、姉寺と呼ばれていた当山は、建歴二年熊谷直実公の息女玉津留姫によって開基された。七堂伽藍を備えた寺は永和四年、管領上杉能憲公及び弟の憲方公は寺の復興に努めたので中興開基と呼ばれている。

応永二十三年 鎌倉騒動、上杉禅秀の乱により戦火で焼失。時は流れ、寛永元年大搦禅師により現在の曹洞宗報恩寺を開山した。」

報恩寺は、こうした苦境に出合いながらも法燈を守り八百年を歴する由緒ある寺である。正徳五年諸堂造営、教化二年諸堂を修復し、棟札を差し入れた。大正十一年本堂茅葺屋根改修の折、棟札を発見し、従来口傳的に伝えられていた寺歴が記述的なものとなった。

終戦前夜の空襲で、伽藍は山門の一部を残して焼失した。

・新本堂について

本堂は、国の文化財に値する木造建造物である。三年余りの歳月をかけて完成した。国産木材で檜を主体に一部桧、檜の丸柱は直径四十五糎が十二本、三十六糎が四本、桧の無節で二十五糎の角柱を四十本使用している。

欄間彫刻は、龍、鳳凰、天女の十四体は堂内の格調を高めている。

山額「熊谷禅林」1791年、忍城主阿部豊後守正識・筆



(熊谷市公協だより 第43号 平成17年より)